

難波

2007.1
No.5

題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

地域連携企画第2弾 「八尾安中新田植田家の文化遺産」

2006年10月14日（土）

会場：（第1部）八尾市・旧植田家住宅

（第2部）八尾市・竜華コミュニティセンター

2006年10月14日（土）、地域連携企画第2弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」（旧植田家住宅現地調査報告会）が、八尾市教育委員会との共催で開催されました。

植田家は、江戸時代後期、安中新田の支配人を務めてきた家とされており、旧植田家住宅が昨年3月に国登録有形文化財に登載、6月には八尾市指定文化財として指定を受けました。また、古文書、書籍、河内木綿、屏風、民具など多彩な資料を所蔵しています。

今回は、昨年度から当センターが進めてきた植田家での調査の成果をもとに、第1部では、植田家にて、生活文化遺産研究プロジェクト研究員森 隆男（関西大学教授）による現地説明会をおこないました。また、第2部では龍華コミュニティセンターにおいて、李 熙連伊（八尾市立歴史民俗資料館学芸員）、藪田 貫（関西大学教授 / 学芸遺産研究プロジェクトリーダー）、岸本邦雄（八尾市文化財課課長）の諸氏にご講演いただきました。

当日は好天に恵まれ、多くの八尾市民の皆さまに、植田家についてお知りいただくことができました。なお参加者は119名でした。

第1部 現地説明会

関西大学教授

生活文化遺産研究プロジェクト研究員
森 隆男

植田家は、宝永元（1704）年の大和川付替え後開発された安中新田に、宝暦12（1762）年、初代植田林蔵が入村して以来、代々新田支配人を務めてきた家とされています。正徳元（1711）年に作成された「安中新田分間絵図」によって、植田家の屋敷が、植田家が入居する以前から、新田と代官との連絡あるいは、地域の人びとの寄り合いがおこなわれていた「会所」として使用されていたことが確認されています。



現地説明会の様子

森氏は、植田家の屋敷に残る、新田会所屋敷としての性格、つまり、公的な部分と、この地域の農家の暮らしが垣間見られる私的な部分の両面について、説明しました。

まず、新田会所屋敷としての植田家については、参加者の方がたに植田家への訪問客になったつもりで説明をすすめられました。そのことにより、武士身分の客人など比較的身分の高い客人は「式台」から招き入れられること、事務的な話し合いをする部屋、重要な客人を接待するための部屋が決まっていることなど、客人の地位や目的により、部屋や対応が厳格に決まっていることを参加者が体感されたと思います。また客間では、襖や違い棚、欄間をご覧いただき、最高のもてなしの一端にも触れていただけたことでしょう。

一方、植田家の暮らしぶりについては、摂津・河内・大和地域でなされていたであろう食生活と、植田家にたくさん祀られていた神さまについて話されました。

例えば、「ダイドコ」と呼ばれる部屋には、神棚が2つあり、お伊勢さんや春日さん、大峰山からの神さまや、大黒さんや恵比寿さん、河内で安産の神さまとして祀られていた水天宮など、たくさんの神さまが祀られていたそうです。

ほかにも、裏口の横に小さな祠がずらっと並び、お稲

荷さんの一種とされる神さまが祀られたり、母屋の妻側のところに、中国の魔除けの神さま鍾馗しょうきの焼物が据えられており、植田家が家族を守ることを非常に大切にされた家だったと示唆しました。

最後に森氏は、「植田家には、会所という公的な場と日常的な暮らしの場が、きちんと空間的に区別されてうまく残されてきた。その意味で植田家は、本当におもしろい貴重な文化遺産ではないか」と締めくくりました。

第2部 講演会

植田家に伝わった河内木綿

八尾市立歴史民俗資料館学芸員

李 熙連伊氏

植田家の人々と学芸

関西大学教授

学芸遺産研究プロジェクトリーダー

藪田 貫

旧植田家住宅整備について

八尾市文化財課

植田家には、節句幟のぼり ゆたんや油単、風呂敷ほっぴ、消防法被などの形で河内木綿が多数伝来しています。李熙連伊氏は、これらの資料の実物を展示し、会場に来られた方がたに間近で見ていただきながら、お話を進められました。

節句織の会場を縦断するくらいの長さで、ダイナミックに描かれた図柄に感嘆の声が上がリ、油単に描かれた家紋に関しては、李氏と来場された方との間で意見が交換される場面がありました。そのほか、節句幟に描かれた図の絵師について、法被や渋川郡安中新田幟に描かれた波しぶきの模様などについて、李氏から興味深い話題が投げかけられ、そのたびに会場のあちらこちらからざわめきが聞こえました。

実物資料の展示と、李氏と参加者との間で双方向的に会話が弾んだことで、会場は終始なごやかな雰囲気包まれていました。

つぎに、藪田 貫氏は植田家所蔵の書籍を素材に、植田家の人びとの学芸環境について話されました。植田家には、『商売往来』、『百姓往来』、『庭訓往来』などの往来物、多数の漢籍、3冊の『女大学宝箱』などが揃っていることにより、植田家における教育的環境が充実しているこ



講演会の様子

とを指摘しました。特に植田家4代市太郎(天保年間生、安政3年見習庄屋、明治4年庄屋)の署名の入った『庭訓往来』の写本を取り上げ、幼少期の市太郎の学習過程について述べました。本文の肩に書かれた日付からわかる進捗状況、本文の書写が途中で止まっていることなど、興味深い事実が浮かび上がってくると述べられました。

また、5代一郎(1850 - 1915)については、大阪の漢学一徳徳堂と泊園書院とののかかわりについて言及しました。特に懐徳堂については、明治2年の閉校後、明治44年に創設された懐徳堂記念会がおこなった祭典のプログラム「懐徳堂祭典執行次第」について紹介され、そこには懐徳堂の復興とともに、儒教形式の祭礼であるせきでん釈奠や、舞楽の復興の動きが見られ、これは大阪文化の復興のプロジェクトだったのではないかと示唆しました。

最後に八尾市文化財課を代表して、岸本邦雄課長が旧植田家住宅の整備計画について話されました。旧植田家住宅の土地・建物、そして古文書や書画、陶磁器など約3万点に及ぶ所蔵資料の概要について説明されたのち、旧植田家住宅の活用方法について、詳しく話されました。

岸本氏は、旧植田家住宅を「(仮称)旧植田家史料館」として復元整備し、安中新田会所屋敷であった植田家を文化財として市民の皆さまに見学していただくとともに、子どもたちに河内木綿や昔の生活を体験してもらう体験学習の場として活用したいとの考えを述べられました。

さらに、土蔵を改築することにより展示スペースを設け、植田家の所蔵資料を展示すること、母屋の座敷や庭でクラシックコンサートやギャラリーなどの催しをおこなうことなどの構想も同時に明らかとなりました。

「(仮)旧植田家史料館」のオープンは、平成21年春以降の予定とのこと。オープンに期待が膨らむとともに、調査にかかわっている者の一人としての責任を再認識しました。(R.A. 松本 望)

アンケートより

●現地説明会

- ・近くに居住し、植田家を文化遺産として説明してもらい、多くの知識を深め、近くにある事を誇りとし知人にも話の種ができた。一人でも多く知っていただきたいと思う。
- ・なかなか見ることのできない内部を見ることができ、また当時の暮らしぶりについて話を聞いてとても楽しめた。

●講演会

- ・旧植田家に関する歴史や所蔵品にまつわる話がとても分かりやすかった。ぜひ大切に後世に伝え、また、多くの人に見てもらえる機会を設けてほしい。
- ・単に古い家屋というだけでなく、安中新田の会所として植田家の価値がよくわかった。

アンケートにご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

大阪ブランドサミット 「祭礼パネル」 出展

2006年10月25日(水)

会場：グランキューブ大阪(大阪国際会議場10階)



講演の様子

大阪の誇るべきブランドと言えば、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。水の都、商都、食文化、ものづくり、お祭りなど、大阪の魅力としてアピールできる素材は豊富です。大阪の魅力である「大阪ブランド」を発信し、大阪の再生を目的に活動しているのが大阪ブランドコミッティです。当センターからは、祭礼遺産研究プロジェクトが取り組んでいる大阪の祭礼研究をもとに、「祭礼パネル」の部門で大阪ブランドコミッティの活動に連携しています。

10月25日に、大阪ブランドコミッティが主催する大阪ブランドサミットが開催されました。文学、バイオ、水都、ものづくり、ロボット、伝統芸能など、各テーマに取り組んだ団体が集結してその研究成果を発表する「サミット」です。当センターからは「大阪の四季を彩る祭礼」と題した報告をおこないました。第1部では大阪の祭礼についての講演、第2部では四天王寺の聖霊会舞楽大法要、および天神祭を映像で紹介しました。

講演では、祭礼遺産研究プロジェクトリーダーの黒田一充が、祭りの画像を提示しながら、大阪府下でおこなわれる一年間の祭礼について解説しました。

日本の祭りは春夏秋冬、四季折々におこなわれています。各季節の祭りの特徴は、その年の農作物の稔りを祈願する祈年祭である春祭り、それに対応する豊作を感謝する秋祭りがあり、収穫した新米を神と一緒に食す儀礼がみられます。冬は農閑期で親睦のため民俗芸能が演じられる祭りがあります。夏には都市部で疫病や飢饉が発生しやすいため、夏祭りにはそれらを防ごうとする意味合いがあります。大阪府下の祭りには、疫病や飢饉などの排除を祈願する夏の都市の祭礼と、春・秋の祭りの両方の要素がみられます。続くスライド上映では、正月から順に、枚岡神社の粥占神事や難波八阪神社の綱引神事、宮座の祭りである野里住吉神社の一夜官女祭(2月)、人形が登場する杭全神社のお田植神事(4月)、高槻市磐手杜神社の馬祭(5月)、住吉大社の御田植神事(6月)、

そして7～8月の「愛染さんから住吉さんまで」と称される大阪の夏祭りや、岸和田市のだんじり祭(9月)、堺市桜井神社のこおどり、八尾市善根寺春日神社の神酒づくり(10月)、少彦名神社の神農祭(11月)、大阪湾から上陸してくる戎神を迎えるために薪を積んで火を燃やす堺市石津太神社のやっさいほっさい(12月)など、約50件の祭りの特徴を簡潔に紹介し、一年を通じて各地でおこなわれる多様な祭りを、大阪の貴重な文化資源としてアピールしました。また、参加者には大阪府下の夏祭りカレンダー2006年版を配布しました。

今回の催しでは、当センターの幟を会場前に設置し、ドアには門幕を張るなどお祭りの雰囲気でお祭りを迎えました。また会場内には、大阪の祭礼地図、聖霊会や天神祭を解説したパネル、近年注目を集めているなにわの伝統野菜と祭りに関するパネルを展示しました。なにわの伝統野菜復活には地域の寺社の貢献が大きく、祭りや法会で伝統野菜を振る舞うなど、「祭りと伝統野菜」の新しい結びつきがみられます。今回は、玉造稻荷神社と玉造黒門越瓜、生根神社と勝間南瓜、法楽寺と田辺大根をパネルで紹介しました。さらに、これら伝統野菜を使った加工食品の展示・試食を実施し、なにわの伝統野菜について参加者の関心を高めることができました。

なお、今回の催しでは、大阪天満宮、天王寺楽所雅亮会をはじめ、なにわの伝統野菜にかかわる皆様など、各関係機関にご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

(R.A. 内海 寧子)



パネル展示の様子



なにわの伝統野菜を使った加工食品の展示・試食

関西大学創立120周年記念行事 「関西大学がはぐくんだ大阪学と中国学」

2006年10月28日(土)

会場：パネルディスカッション 関西大学BIGホール100
特別講演「篝の舞楽」 関西大学尚文館前中庭

今年、関西大学は創立120周年を迎えました。節目の年を記念する行事が、学内や学外でさまざまに行われました。なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、「関西大学がはぐくんだ大阪学と中国学」を総合テーマとした記念講演会のうち、「日本のなかの大阪文化遺産」をメインテーマとしたパネルディスカッションと、特別公演「篝の舞楽」を開催しました。

パネルディスカッション 「日本のなかの大阪文化遺産」 基調講演：なにわ・大阪の文化遺産 高橋 隆博

(なにわ・大阪文化遺産学研究センター長)

パネルディスカッション 森 まゆみ氏 (作家 / 地域雑誌編集者) 小野 功龍氏 (相愛大学音楽学部教授

/ 天王寺楽所雅亮会理事長)

Andrew Gerstle 氏 (ロンドン大学 SOAS 教授)
笑福亭 仁智氏 ((社) 上方落語協会理事)

総合司会 藪田 貫 (なにわ・大阪文化遺産学研究センター 総括プロジェクトリーダー)

会場のBIGホール100に、天神祭のお囃子が流される中、開始予定時間の13時に、パネルディスカッション「日本のなかの大阪文化遺産」が始まりました。関西大学の森本靖一郎理事長と河田悌一学長の開会挨拶があり、司会は、藪田氏に引き継がれました。

高橋センター長による基調講演「なにわ・大阪の文化遺産」では、センターの活動は、末永雅雄・有坂隆道・藪田香融の三先生が築かれた伝統を受け継いだものであることが熱く語られました。

パネルディスカッションでは、森氏・Gerstle氏によって東京や外国からみた大阪の文化遺産について問題提起がなされ、それを受けて大阪の伝統文化を支える小野氏・

仁智師匠がコメントをされました。フロアからもいくつかの質問が飛び出し、熱をおびた議論がなされました。

「空気」として普段まったく意識していない大阪人こそが、改めて大阪の文化遺産を考えなければならない、そのためにセンターがあるのだとのまとめで、パネルディスカッションは終了となりました。

参加者は350名で、定員よりも少なかったのですが、参加された方々は、基調講演、パネルディスカッションともに熱心に耳を傾けておられ、会場は1000人分の熱気が感じられました。

特別公演「篝の舞楽」

振銚 (えんぶ)

篝の火入れ

陪臚 (ばいろ)

還城楽 (げんじょうらく)

長慶子 (ちょうげいし)

演奏：天王寺楽所雅亮会

解説：小野功龍氏 (雅亮会理事長)

当日の一番の心配事であったパネルディスカッションから舞楽公演への会場移動も、参加者の方がたのマナーと、学長課スタッフの手際よい誘導により、混乱もなく進み、開始予定時間よりも5分早く、16時25分に特別公演「篝の舞楽」が始まりました。

高橋センター長による天王寺舞楽の紹介の後、雅亮会理事長小野功龍先生が登場されました。いつもながらの名調子の解説につづき、「振銚」、「陪臚」へと演奏が進む頃には、尚文館前中庭では、1200名に及ぶ人々が、天王寺舞楽の世界に惹き込まれていました。なかでも「還城楽」は、渾身の舞で、鬼気迫るものが感じられ、人々の心を強く打つものでした。

「振銚」が舞い終わる頃には、キャンパスは夕闇に包まれました。入念なりハーサルのおかげで、篝の点火もうまくいき、天王寺舞楽に一層の趣を加えました。



有坂先生創刊の『上方文化』
を手に熱く語る高橋センター長



パネルディスカッション 壇上に並ぶパネラー諸氏



色鮮やかな襲装束の楽人さんも見ものでした

120周年記念行事を終えて

—センターの第2ステップへ—

舞楽会の最後には必ず演奏されるという長慶子の音色とともに、パネルディスカッション「日本のなかの大阪文化遺産」・特別公演「篝の舞楽」は終了しました。

今回も多くの方がたのご協力を得ることができました。パネルディスカッションのパネラーの先生方や、天王寺楽所雅亮会のみなさんには、この企画の趣旨に賛同し、快く出演をお引き受けくださり、感動をより大きなものにしていただきました。また、四天王寺勸学部には、さまざまなアドバイスをいただきました。

また、今回は創立120周年の記念行事ということもあり、学内をあげてバックアップをしていただきました。特に、学長課の方がたには、今回の行事が、大学との共催であったことから、企画から当日の運営まですべてにわたって二人三脚で進めていただきました。会場設営にあたっては、日本ステージやオレンジパオ、きんでんなどの業者の方がたには、何度も打ち合わせを経て、素晴らしいものを作っていただきました。それぞれのお名前は挙げませんが、今回の行事に携わっていただいたすべての方がたに、心から厚くお礼を申し上げます。

パネルディスカッションや舞楽公演を通じて、なにわ・大阪文化遺産学研究センターへの注目度が以前よりもさらに高まったことを、企画当初から関わっていた者として肌で感じました。また、同時にセンターのこれからの課題も数多く投げかけられたと思います。そうした意味において、今回の行事で、センターは次なる一步を踏み出したといえるでしょう。センターのスタッフが一丸となって今後さらに前進していきたいと思えます。

なお、今回の行事の様子は、10月28日のANNニュース(朝日放送)で放送され、10月29日付け朝日新聞朝刊に掲載されました。

(R.A. 櫻木 潤)



舞台の邪気をはらう振鉾



篝火に照らし出される陪臚



渾身の還城楽

第2回ワークショップ「お茶と茶釜」

2006年11月18日(土)

会場：関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
関西大学「千里庵」

2006年11月18日に、第2回ワークショップ「お茶と茶釜」が開催されました。佐び茶の祖として知られる千利休は堺の生まれであり、また大阪には「河内鑄物師」という鑄造職人集団が存在していました。このように、大阪はお茶、茶釜のような鑄物と深いかかわりのある土地ですが、日ごろなかなか触れることのない茶の湯の世界を体感していただくというのが、第2回ワークショップの主旨です。

第1部では角谷征一氏の父であり人間国宝である角谷一圭氏による茶湯釜製作工程の記録ビデオ上映の後、角谷征一氏による「茶湯釜ができるまで」と題した講演を、第2部では関西大学茶道部を指導しておられる福原宗寿宗匠、茶道部OB・OGから成る洗心会の方がたによるお点前の実演と解説をしていただきました。そしてお点前の解説の後、参加者には学内に設けられた茶室「千里庵」に移動していただき関西大学茶道部の方がたのご協力のもと実際に茶道を体験していただきました。当日はあいにくのお天気にもかかわらず、41名参加がありました。

第1部「茶湯釜のできるまで」

茶湯釜の製作はまずデザインを決めるところから始まります。全体のプロポーション、意匠などを決め、図面にまとめ木型を製作します。そして鑄型や中子、鑲付などの作成など数々の工程を経て茶湯釜は製作されます。ビデオによって、在りし日の角谷一圭氏の技術を余すところなくみることができただけでなく、茶湯釜の製作工程も詳しく知ることができました。

角谷家は元々宮大工の家系でしたが、たまたま訪れた鑄物工場で鑄物の製作に感銘を受けた祖父巳之助氏が鑄物業を始められました。父の一圭氏は小学5年生のときから鑄物業に携わり、21歳のときに大阪工芸展での初受賞、第5回日本伝統工芸展で高松宮総裁賞を、第8回日本伝統工芸展では朝日新聞社賞を受賞され、昭和53年に人間国宝に認定されました。また昭和48年、平成5年には伊勢神宮式年遷宮御神宝鏡を納められました。このような巳之助氏や一圭氏のお話だけでなく、道具を手に取りながら茶湯釜の製作に関する話や茶湯釜の鑑賞の仕方や扱い方などについても話されました。

また、角谷氏が巳之助氏、一圭氏、ご本人の製作による作品や茶釜製作にかかわるいろいろな道具を持ってきてくださり、展示しました。講演終了後には参加者の方がたがそれらの作品・道具を興味深く観賞し、角谷氏が



角谷征一氏による解説

色々説明して下さるその言葉に熱心に耳を傾けていました。講演を通じて茶湯釜を身近に感じていただけたのではないのでしょうか。

第2部「茶道体験」

ひきつづき、関西大学茶道部OB会「洗心会」によるお点前の実演と福原宗匠による解説が行なわれました。実習・展示室に備え付けられた畳敷きの部分を茶室に見立ててお点前を実演していただきました。見立てられた茶室の前に敷物を敷き、参加者にはそこに座っていただき、より近い位置で、より近い感覚でご覧いただきました。今回は亭主と3人の客という少人数の薄茶のお点前を再現しました。まず、正客が茶室に入り、軸や道具などを観賞してから席に付きます。次客、三客と続き、全員が着席してお点前が始まります。福原宗匠が、道具や所作について解説していただきました。

解説の後、参加者は2班に分かれ、茶室「千里庵」へ移動して実際にお点前を体験をしました。第1班は学生を客人として、茶道部の現役学生がお茶を点て、洗心会のかたがいろいろと解説していただきました。第2班では、一般参加者とセンター関係者がお点前に参加しました。

さすがに創部58年の歴史を持つ茶道部だけあり、滞りなくお点前は進行し、席も非常に和気あいあいとした雰囲気でした。終了後も道具などを観賞しながら学生が熱心に質問をしていたのは印象的でした。

今回のワークショップは角谷征一氏、福原宗寿宗匠をはじめ、洗心会の方がた、そして関西大学茶道部の方がたの多大なるご協力のもと無事に開催することができました。深く感謝いたします。

(R.A. 千葉 太朗)



洗心会による点前実演と福原宗匠の解説

第3回 NOCHS文化遺産学フォーラム 「街づくりと文化遺産」

2006年11月25日(土)

会場：(株)りそな銀行大阪本店

2006年11月25日(土)、株式会社りそな銀行大阪本店地下講堂において、第3回 NOCHS文化遺産学フォーラム「街づくりと文化遺産」が開催されました。基調講演に東京大学大学院経済学研究科教授の神野直彦氏を迎え、経済学の立場から現在の日本社会の実情について、諸外国との比較を交えながら語っていただきました。また、パネラーには全興寺住職で「平野の町づくりを考える会」会長の川口良仁氏、徳島市「新町川を守る会」代表の中村英雄氏、「天神橋筋商店連合会」会長の土居年樹氏、「株式会社りそな銀行地域サポート部」プランニングマネージャーの藤原明氏、「新世界アーツパーク事業」の角知子氏の5名を迎え、それぞれの活動を紹介していただきました。会場後方には、牧村史陽氏の写真の中から上町台地近辺のものを選び、同じ場所を撮影した現在の写真と並べて展示しました。

基調講演で神野氏は、近年日本が国際競争力を失いつつあるのは、人間への信頼感を失ったことに起因しているのだといいます。データによると、日本人の大学生のうち、「ほとんどの人は他人を信頼している」と答えたのは3割にすぎず、8割が「この社会では、気をつけていないと他人に利用されてしまう」と考え、「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」ことを信じているのは4割に満たないという寂しい結果が出ています。明治時代には「やさしさ」や「謙譲」や「心のゆとり」が日本人の特質として挙げられていましたが、現代の日本はそれをなくしつつあるのではないのでしょうか。それは戦後の高度経済成長を経験し、工業社会化した日本が、もともと持っていたはずの文化、つまりは生活様式を崩してしまったからです。神野氏は、工業社会というものが存在欲求(=心の豊かさ)を犠牲にして所有欲求(=物的な豊かさ)を満たす社会である以上、ある意味で当然のことなのだろうと指摘されました。

ヨーロッパでは、かつてあった生活様式を復活させることによって地域を発展させるという試みが行われている地域があるそうです。そもそも生活様式というのは地域から生まれたものであり、地域にとって無理の無いものでなければ定着できないものはずですので、そこに矛盾が生じるはずはありません。神野氏は、地域に内在的な力を伸ばすことによって発展した社会は住みやすい社会であり、そこには自然と人びとが集まってくるのだといいます。その内在的な力というのがすなわち、文化遺産のことなのではないのでしょうか。

このことは今回のフォーラムの大きなテーマになっているように思います。たとえば、「平野の町づくりを考

える会」は行政などの援助を受けずに運営されています。外からの力を安易に導入せず、平野の町にもともとあるものを再発見することによって地域を振興していく手法はまさに内在的發展ですし、「新町川を守る会」や「天神橋筋商店連合会」の活動も、地域の人びとに自分たちの町の文化遺産に気付かせるという点では共通しているといえます。一見、奇抜なことをしているように見える「新世界アーツパーク事業」の活動も、その基盤にあるのはしっかりと地域に根ざした文化であり、それを新しい手法で表現しようとしているものです。りそな銀行が展開する「REENAL」という概念は地域や企業のポテンシャルを引き出すという、端的に内在的な力を使った活動といえます。

ただの懐古主義にならず、常に未来に目を向けながら地域の文化遺産を守っていくことは非常に難しいことです。そのバランスをうまく取れるかどうか、今後の町づくり関連活動において重要な課題となるのではないかと感じました。

個人的には今回のフォーラムでもっとも強く印象に残ったのは「子供たち」でした。子供たちには文化遺産を継承する権利があります。そして、失われつつあるかもしれない文化遺産を守り、次世代に継承する基盤を築くことは、職業として文化遺産に携わる者だけでなく、すべての責任ある「大人たち」の義務なのではないでしょうか。また、そうでなくては文化遺産を守ることは不可能なのではないかとさえ思います。今回のフォーラムはそのことについて深く反省させられるとともに、その重要性を再認識する貴重な機会ともなりました。

(R.A. 宮元 正博)



パネリストのディスカッション風景



大阪の昔と今の街並みを紹介するパネル展

来館者の紹介

センターの活動とともに、センターを訪れる人たちが目に見えて増えるようになりました。この機会に最近センターを訪ねられた方がたを紹介いたします。

8月 Jan Sýkora (ヤン・シーコラ) 氏

(チェコ・カレル大学哲学部日本学科助教授)

「チェコにおける日本研究の現状～カレル大学を中心に～」と題して講演していただきました。

9月 山田豊弘氏

(りそな銀行地域サポート本部)

(りそな御堂筋ビジネスソリューションプラザ・ランニングマネージャー)

11月25日に行われた、第3回文化遺産学フォーラムの打合せのために来館されました。

10月 Franziska Ehmcke (フランチエスカ・エームケ) 氏

(ドイツ・ケルン大学日本学科教授)

「オーストリアで新再発見された大坂図屏風」と題して講演していただきました。エームケ氏が紹介された屏風は、2006年10月19日(木)の朝日新聞朝刊1面に掲載されました。

11月 朝賀 浩氏 (大阪市立美術館主任学芸員)

小浮恵子氏 (日本経済新聞社 企画事業部)

エームケ氏が紹介された「大坂図屏風」に関する用件で来館されました。

伊藤賢一氏 (大阪市立中央高校教諭)

大阪文化遺産学の学習に関する高大連携事業について相談するために来館されました。

12月 藤原 学氏 (吹田市立博物館学芸員)

当センターの韓国文化遺産視察の、プランニングのアドバイザーとして来館されました。

太田直之氏 (國學院大学専任講師)

後藤 匠氏 (國學院大学職員)

オープン・リサーチ・センターの視察のために来館されました。



フランチエスカ・エームケ氏



ヤン・シーコラ氏

施設の紹介

大阪には、独特の「なにわ伝統野菜」があり、大阪の農業と食文化を支えてきました。なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、これら「なにわ伝統野菜」を研究するために、いくつかの品種を「なにわ実験農園」で栽培しています。

「なにわ実験農園」は、広さ2.5坪程度のミニ農園ですが、これまでに、勝間なんきんや天王寺蕪、玉造黒門越瓜を栽培・収穫し、その育成過程を記録してきました。現在は、これからの寒い季節にかけておいしくなる、田辺大根が、そろそろ収穫の時期にさしかかろうかというところです。大根は、一本ずつ担当者を決めてあり、P.D.もR.A.もそれぞれ、「自分の大根」を丹精こめて育てています。



編集後記

難波渦No.5をお送りいたします。今年の秋は、当センターにて大きな催しが立てつづけに開かれ、その準備や運営に携わる中で、この先、忘れることができないような体験が、P.D.、R.A. 各人にありました。あらためて誌面を振り返りますと、各ページいずれも、本来ならばトップ記事として掲載したいトピックスばかりです。限られた紙数ですべてをお伝えすることはできませんが、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの奮闘を濃縮してお届けしますので、どうぞ味読ください。

(R.A. 内田 吉哉)

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

なにわがた
News Letter 「難波渦No.5」

発行日 2007年1月31日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

発行者 高橋隆博

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL 06(6368)0095 Fax 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.html>

E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所・編集協力 (株) 廣済堂